

## 鬼師の世界

——浅井長之助と衣浦観音像——

高 原 隆

愛知県高浜市、禰護山の山頂に観音寺がある。小高い丘のようなところで、その境内の中に町を見守るように立っているのが衣浦観音像である。昔は、禰護山の下は崖で、海辺になっており三河湾が広がっていた。高浜と対岸の亀崎を結ぶ渡し船が行き来をしており観音像は舟の安全を祈願するために作られたともいう。ただ昭和31年には衣浦大橋ができ、昭和43年には無料化がなされ、対岸との往来は便利になっている。実際には観音像は昭和34年3月15日に建立されており、台座には浅井長之助が作った十二体の十二支像が配置され、卯の方角、つまり東を正面にして高浜の町に向かって立っている。観音像は塩焼きで仕上がった陶管製であり、この作りのものとしては日本一の大きさと言われている。観音寺の建つ丘、禰護山のふもとにあるかわら美術館の野外広場に出ると、丘の上に立つ美しい観音像がはっきりと目に入ってくる。ある意味で、陸の灯台のような眺めになっており、高浜市の顔と言えよう。

ところで、今回のテーマはこの顔についてである。つまり、「衣浦観音像の顔のモデルは誰なのか」が、主題である。衣浦観音像を作った人物ははっきりしている。初代鬼長の浅井長之助である。鬼長についての調査をまとめたのは2004年の事である。(高原2004)その時に初めて浅井長之助と衣浦観音像のつながりについて言及した。しかし、当時はそ

の観音像に具体的なモデルがあるとは全く念頭もなく、事実、インタビューした人々も、職人としての長之助と直接つながりを持たなかったこともあり、長之助と観音像との関係に深く踏み込む余地はなかった。

### 篠田勝久と浅井長之助

その関係が思いがけずも浮上してきたのは訳がある。1998年に始まった「鬼師の世界」の旅は、さまざまな鬼板屋を巡って行くなかで、2000年にはシノダ鬼瓦へとたどり着き、それからさらに巡り巡って、再度シノダ鬼瓦へ至ったのが2012年の事である。偶然にもシノダ鬼瓦の初代篠田勝久は鬼長で修業をし、鬼板師になった人であった。鬼長に小僧として入ったのは昭和25年(1950)頃である。その当時、勝久の親方は初代鬼長、浅井長之助であり、その長之助のもとで腕を磨きながら職人として働き、昭和37年(1962)に、独立している。現在(2013年)、直接、浅井長之助を知っている数少ない人物のひとりであり、しかも鬼長という鬼板屋で、鬼板師としての長之助をじかに知っている人物は今現在、他にはいないのではないかと考えられる。それゆえに勝久の長之助に関する話は貴重なものと言えよう。その長之助にまつわる話の中で出てきた話題が衣浦観音像を作った長之助の物語であった。(高原2013)衣浦



第1図 衣浦観音像 高浜市禰護山観音寺 浅井長之助作

観音像は実際に行って見るとよくわかるが、高さ8メートルの堂々とした像であり、表面に塩焼きがよくかかった茶褐色の光沢のある美しい姿をしている。勝久に会うまでは実はここまでであった。これほどのものを残した浅井長之助という人はかなり腕の立つ鬼師だったのだなあと思直に思っていた。ところが2012年6月15日に勝久に会って話を聞いていたところ、思いもかけず勝久が長之助と観音像の関係について言及し始めたのである。(第1図参照)

まあ、お観音さんは、まあ、あの一、あれ

ねえ、「山本富士子」っていう映画俳優の人知って見える？

あの子の顔……、目的で作らした。

お顔はね。

お観音さんの姿は昔から(伝統的な)あれが、すでにね、あるけんねえ。

勝久は衣浦観音像にはモデルがあると言っているのである。昔から伝わっている観音像ではない。長之助は長之助が美しいと見なした

女優、「山本富士子」を観音像のモデルとして観音像を製作したことになる。(高原2013)

この時、実は、「山本富士子」を衣浦観音像の写真と並列させてどこまで似ているのかを見比べてみようとしたいきさつがある。すでにすべての内容は書き上げており、あとはその場に合う適切な写真が入手できればほぼ終わりという段階にあった。その時、原稿の締め切りが近づいていて時間がほとんどなかったこともあり、思わず二人の知り合いにメールを送り、今回の件を話して、山本富士子の写真を依頼した。一人が郷里の山口県周南市にあるマツノ書店主、松村久氏であり、もう一人が(株)あるむの川角信夫氏であった。松村氏からは市の図書館に行くように言われた。すぐに豊橋市立図書館に行くに必要な資料はその場で入手できた。ところが、川角氏からは次のようなメールが届いた。

山本富士子の第二報です。家の者に聞いたら「あれは昭和天皇の奥さん(平成に亡くなった皇太后)だ」という話を聞いている、と言っていましたが、山本富士子で裏が取れますか。それなら安心ですが。

川角氏は高浜の人で、鬼瓦関係の人々とも交流があり、こちらが知らない話を知っておられたのだ。この川角氏のメールがきっかけで今回の調査は始まっている。

これは何とか解決しなくてはいけないと次第に考えるようになり、まずは山本富士子説が出たシノダ鬼瓦へ行くことにした。シノダ鬼瓦の現親方は宮本恭志である。シノダ鬼瓦は「鬼師の世界—白地：シノダ鬼瓦—」(高原2013)で詳しく述べたとおり、その始まりが鬼長から起こっている。初代篠田勝久(旧姓神谷勝久)が昭和25年頃に鬼長の小僧となり、現在に至っている。さらに、勝久が鬼長で職人をしていた時、腕の良さを買われ

て親方浅井長之助の妹、「ちよ」の娘、篠田澄美江と養子縁組を行い、篠田勝久となっている。すなわち、シノダ鬼瓦は浅井一族の一員であり、鬼長系の職人として長之助の流儀を今に受け継ぐ鬼板屋ということになる。そして、勝久は直接、親方である長之助を職人として知っている人物なのだ。

### 森五郎作とヤマ森陶管、第四工場

さてここからは時系列に沿って浅井長之助と衣浦観音像について述べていく。まず川角氏のメールの件を宮本恭志に伝えて、「山本富士子なのか、昭和天皇の奥さんである香淳皇后(1903-2000)なのか」はっきりさせたい旨を話した。すると、恭志はひとりの人物を紹介してくれた。鈴木康之という人で、何と勝久の自宅の一軒おいて隣に住んでいる人であった。早速、恭志に家まで連れて行ってもらった。

いきなりの訪問にもかかわらず、家はこぎれいで、入り口にある庭には大きな池があり、様々な色の大きな鯉が群れを成して悠々と回遊していた。家の中に入り、こちらの意向を改めて伝えた。しばらく話したのち、インタビューに入ることになった。鈴木康之は昭和7年2月4日生まれであり、終戦後の昭和21年(1946)、14歳の時に三河高浜駅のすぐ近くにあった森五郎作の経営するヤマ森陶管の第四工場へ入社している。生まれは衣浦大橋を渡った、高浜から対岸にある亀崎であった。少し鉄鋼関係の仕事もしたが長続きせず、ヤマ森で土管屋の職人として土管を作っていた。現在は土管屋は高浜から姿を消してしまっているが、かつては瓦屋と同様に高浜の主要産業の一つであった。明治末から大正にかけて土管が製造されるようになり、大正3年の三河鉄道開業に合わせて、三河鉄道沿線に土管屋が広まっていった。ところが戦後しばらくすると、土管と競合するヒューム管

や塩化ビニール管に押され始め、平成16年3月有限会社森組陶管製造所が解散して、高浜市から土管産業が事実上姿を消したのである。高浜の土管産業の調査は内藤良弘によって綿密になされている。(内藤2008)

鈴木康之との話から長之助とヤマ森陶管との関係がまず浮き上がってきた。そもそもなぜ康之が重要な人物としてここに登場しているかの理由から始めたい。浅井長之助がヤマ森陶管の工場で衣浦観音像を製作したことが第一の理由である。長之助は自分の仕事場である鬼長でこの観音像を作ったのではない。第二の理由は、康之がヤマ森陶管で職人として働いていたことがあげられる。第三の理由は、ヤマ森陶管で職人をしていた時に衣浦観音像の製作が同じ仕事場で始まり、長之助の仕事の手伝いをしたことである。以上のような理由が鈴木康之にインタビューをする強い動機になっている。康之に浅井長之助と森五郎作との関係を聞くと次のように話している。

それーは、聞く話によると……。

すぐにそれに続いて康之の奥さんである、その場に同席していた登志子が答えている。

そこは、ちょっとー、はっきりしたことはわからんね。

続けて康之が、同じようなことを話すのであった。

まんだ餓鬼の頃(20歳ごろ)だで、はっきりしたことはわからん。ヤマ森の社長さんと、それから、あの一、鬼長さんがねえ、その人とどういう関係だったか……。まあ親しくはしていたということは確かだと思っけどねえ。

商売上の付き合いかと問うと、それもありません。登志子は歳についても言及しなかった。

同い年くらいじゃなあ。ちょっとヤマ森の社長さんの方が若かったか。

浅井長之助は神谷長之助として明治25年(1892)に生まれて、昭和39年に亡くなっている。(高原2004)一方の森五郎作は明治22年(1889)生まれであり、昭和42年に亡くなっている。(内藤2008)つまり、二人は同郷で、ほぼ同年代であり、同時代を過ごしてきており、長之助が鬼板屋、五郎作が土管屋という他の産業と比べるときわめて近い業種となり、親しい間柄ではなかったかと推測される。

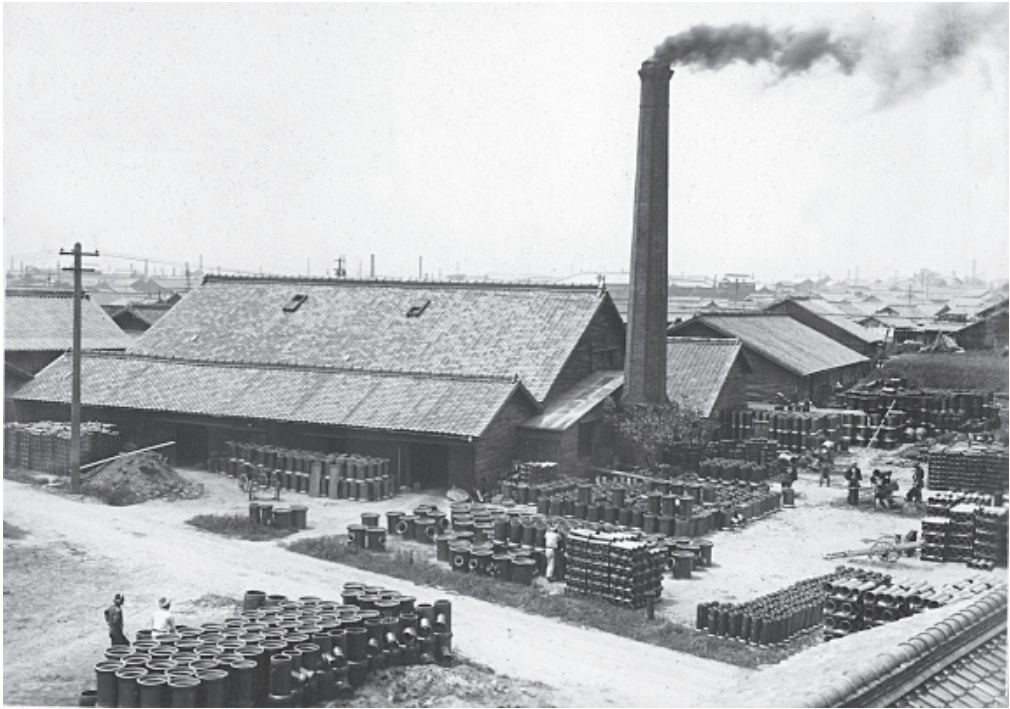
登志子(昭和9年9月27日生まれ)は自分自身の事とヤマ森の事を少しずつ分かるように説明してくれた。

ヤマ森っちゅうのは9人の兄弟がいやすってねえ、そいで確か9人だった。ほいで工場が9個あるんですよ。第一から第九までねえ。

それで、そういう関係で、あの一、うちの、あの一、第一工場の方へ、みんな、あの一、就職、ねえ、昔だから小学校降りて小僧に入ったわけねえ。

それで、親が、そこで、あの一、勤めておって、で、自分は、あの一、第一の、第一っちゅうと、本家なんですけどね。本家じゃなくて、分家の方の第四工場の方へ、の、小僧に、あの一、あれ、あの一、入って、その一、第四の「しゃ」、あの一、社長さんという人が森五郎作さんで……。

で、その森五郎作さんの親の代わり、ま



第2図 ヤマ森陶管 第四工場全景

あ、昔だとのれん分けっていうような感じ、あの工場を一つ持たしておくれて、土管屋をやとったんだけど、それはもう潰れちゃったんですけどね。

このように登志子は康之よりも早く小学校を卒業してすぐにヤマ森陶管に、親がやはりヤマ森で働いていた関係上、小僧として入ったのである。また、配置先がのちに康之が入社してくることになる同じ第四工場の、森五郎作のもとで働いていた。(第2図参照) 登志子が述べているように、ヤマ森陶管は創業者が森千代吉といい、明治30年に始まり、千代吉の子供が9人ほど生まれ、それぞれに陶管工場を持たせていき、第一工場から第九工場を持つ一大陶管グループ会社を形成し、高浜では代表的な町の有力者になっていったのである。(内藤2008) 町の有力者としての一端を示しているのが、高浜の町政に一族の者が多くかかわっていたことであろう。

あの、第一の、第一っちゅうと本家ですけどねえ。本家の人が高浜の、ちょ、町長さん。

それから、まだ、一つは、あのー、第四の、その、森五郎作さんの娘さん……、金吾さんか。森五郎作さんの息子さんが、市議員やらして。町長議員だあ。あの当時だでなあ。

第八のやつ、第八の、第八工場の人もやりましたね。町会議員。だもんで高浜として有力者だ。

ヤマ森陶管グループは会社の財政的な基盤を背景に、町の政治にかかわる高浜の有力者として、高浜の町に積極的に貢献することを意識していたように思われる。康之は次のように言っている。



第3図 森五郎作

どうだろうな、高浜の有力者等がそろって、何かやるかって話になって、お観音さんでも作るかってって、ほいで、そこで、鬼長さんが、名前が出たんじゃねえ……、どういうふうだか知らんが、それこそ小さい20歳前の事ですもんねえ。

どのように、どこで観音像をつくる話が出たのかははっきりとは分からない。しかし、7代目鬼長の浅井和美によると、長之助は、ある時、夢の中に誰かが長之助の枕元に立ち、「観音像を作りなさい」と告げられたという。そして、長之助はいつか観音像を作りたいと思うようになったという。一方、森五郎作の孫にあたる森和信は長之助が観音像を作る場所を探していたと聞いているという。このようにして長之助の観音像の話が、何らかの形で森五郎作に伝わり、観音像製作の具体的な計画が高浜の一大事業として現実化していったのである。

面白いことに森一族の中でとりわけ変わっている人物がいた。それが第四工場の社長、森五郎作であった。森九人兄弟の中で五郎作が中心となって高浜に対して今日という町の

文化財に値するものを寄贈し残している。他の兄弟も大なり小なり貢献はしていると思われるが、森グループの中で特に文化財に関して中心的な役割をなした人物が森五郎作であった。(第3図参照)昭和9年(1934)2月春日神社正門に狛犬を一对、土管焼きで焼いて奉納している。杉浦庄之助に製作を依頼している。また同様に杉浦庄之助によって作られた同じ形の狛犬が満州国撫順神社に納められていた。(高原2009)また昭和29年12月には高浜小学校正門の南側に楠正成父子の像が寄贈されている。この時も窓庄の杉浦庄之助が製作を請け負っている。(高原2009)そして、今回の主題である観音寺の衣浦観音像である。この時は観音像建立奉賛会が設置されて、観音像が建立されている。森五郎作が窯元となり、浅井長之助が製作している。昭和34年3月15日に建てられている。さらに大山公園には長之助が作り、森五郎作土管窯で焼成された大たぬきがある。この陶管製たぬきは、昭和39年10月4日に建立されている。このように高浜には土管製の特大モニュメントが土管屋の当時の隆盛をしのばせる重要な文化財としてあちらこちらに点在している。その文化財製作の中心人物が森五郎作であった。康之は長之助と関わり合いを持つようになったいきさつを語っている。

まあ、わしが等が、あの一、鬼長さんて名前を知るようになったのは、お観音さんを作るで、あの、土管屋の、職人だねえ。そういう人が等に、あの、手のすいたときは手伝ってやってくれよって話から、鬼長さんってことを知るようになったなあ。ん、わしの場合ね。

観音寺は康之・登志子夫婦にとっても記念碑的な存在であった。

俺ん等が結婚した一……が(昭和)33年

だから。ほんで、お観音さんが出来て、あの一、出来て、あの、祝いをやるときに、が、俺ん等が結婚した年だっただあ、あの、なあ……。

観音さんがあそこに建った時に、ちょうど結婚した。33年です。

正式な建立年次は昭和34年3月15日となっている。ところが昭和33年(1958)には建立の工事が始まり、実際に観音像が一般に姿を現したのである。観音像が作られる下準備についても康之・登志子の話から具体的に見えてくる。

俺ん等が結婚した……が33年だから、その一、2年くらい前だなあ。

(登志子) 2年……まっと前じゃないー……。

下準備ってのが何年ていうほどかかって、大きな工場を、の、平屋を、それを二階張りにして。仕事場作るがために……。二階で(観音像の)仕事して、下は土管屋やつとるてえことだったかな。

(登志子) その第四工場で……。

その支度<sup>したく</sup>まで入れると、2年ばか前じゃねえ……30、20何年、7、8年。

いきなり観音像を作る仕事に取り掛かったのではなく、まず観音像を作る場所をこしらえる作業があったことになる。それは第四工場の土管を作る仕事場で、その建物を平屋から二階に改造して、一階はこれまで通りに土管の仕事場とし、新しく作った二階は長之助が観音像を作る作業場としたのである。

その前の支度が一、結構時間かかるとるだと思う。

工場から直して、二、二階にして、それで、お観音さんを作るがために大きな板がいるでしょう。それを、板を、今度、大府の、確か、あの一、材木屋さん。森五郎作さんの、あの、息子さんの奥さんの在所が大府で、材木所をやってみえたから。それから、あの一、頼まれて、板を持って、それで板を始めから作って。だで、板から、土から、どうしたっていうと一、ほやあ、2、3年はどうせんでもかかる。

もともと平屋だった工場を二階にしたわけだが、二階にするやり方が異なっている。

(工場は) 二階建てじゃないで、それを二階にし直して、直してってゆって、縁<sup>えん</sup>を張っただけだけど……。もともと高い工場の、……、丈の高い工……。

(登志子) 十分二階張ってもねえ、上下の、あの、高さがありましたので……。

つまり、工場内部に板で縁を張って、中二階にして仕事場をわざわざ新たに増築したのである。しっかり打ち合わせを行い、綿密に計画を立てて、五か年計画のようなプランを作り実行に移したのだ。

もう一つの下準備が土の調合であった。全長8メートルの土管製の観音像を作るのである。長之助は鬼瓦の土は扱いは慣れていたとしても、土管用の土は初めてであった。

(登志子) 土って言っても、こんな乳鉢ですってねえ。いろんな調合して……。あの一、収縮具合とか何とか。で、それを、また、これくらいの水盤をいくつか作られたね。

そー、作って、どんな程度の縮み具合か。それは、あの一、小僧さんがやられとるわけですけどね。

(康之) 土管の粘土に、また、あの、大きなもん(観音像)作るだから、縮み具合がみな違っちゃっちゃあ、上手に合わさらないで……。その研究でも2、3年かかっているけどなあ。ほいだで昭和20……7、8年。

(登志子) そんくらいは、ま、

(康之) ……の頃からやられとるじゃないかなあ。実際、あの一、それまでの、きつと、親方てえだか、社長さんが等の打ち合わせに、まで入れると、かなり……。うん、作ってもらえるとか、作るならどれくらいのもの作るとか、打ち合わせが当然あったわけだから。

このような下準備の動きを実質的に支えていたのが森五郎作であった。五郎作は他の兄弟にはない、もう一つ変わったことをしている。満州の撫順へ土管工場を作り進出して行ったのである。

ほや一、親方(森五郎作)の腹の太いってことは言うまでねえ事だと思うね。

(登志子) あの、五郎作さんて人は、満州にねえ、工場広げて、ほいで何人かこちらから小僧連れて、向こうへ渡ってねえ、満人たちを使ってみえたわね。土管屋を。

で、私の父(杉浦正利)は、あの一、まあ、一番弟子みたいなので、五郎作さんについて……。毎年夏しか帰って来ないです。それまで満州で。ほいだで、小さい時父親と暮らしたっていう覚えはないです。

ともかく五郎作さんて人は肝が太っとい人かしらねえ。(笑い)

で、私らも一、向こうへ、「満洲へ、みんな家族行くか」って言うったんですけど。母親(杉浦はつゑ)が「やだ」てってねえ。(笑い)こっちで頑張って、あの、ほんで、五郎作さんとこの第四工場っていうところで仕事やってたんですよ。

このように森五郎作は創業者、森千代吉に生まれた九人兄弟の中で、戦前は満州にも土管工場を唯一建設した進取の気性を持った人物であった。さらには陶管製の狛犬、楠正成父子像、観音像、大たぬきといった高浜に今も残る記念碑的な土管時代の大モニュメントを次々と作っていった。なぜこういった通常の土管以外の土管製像創作に興味を抱いたのかはわからないが、単なる土管製造に飽き足らず、土管製造の枠を超える美の地平に魅かれて五郎作は歩みを進めたといえよう。すでに述べている通り五郎作は狛犬、楠正成父子像を窓庄の杉浦庄之助に製作を依頼し、観音像と大たぬきを鬼長の浅井長之助に製作させている。杉浦庄之助、浅井長之助ともに鬼師である。(高原2004, 2009)この時に土管の世界と鬼板の世界がめぐり合うことになった。その産婆のような仲介役をしたのが森五郎作であった。産み出された数々のこれら名作は三河の土を母体にして、鬼師によって形作られ、土管職人によって土管窯で焼成されたのであった。土管屋と鬼板屋コラボレーションの共同作業は新しい文化の誕生であり、美の表現であった。しかし、土管産業が高浜から消えたことによって新しい美の地平線はその姿を消してしまった。土管屋と鬼板屋のコラボレーションの消滅であった。数々の特異な共同作業によって産み落とされたモニュメントはありし日の土管業界の威光と、土管屋と鬼板屋のコラボレーションから生み出された独特な高浜



の美を今に伝えるのである。それゆえにこれらの像は人と土地と伝統が生み出した高浜の貴重な文化財と言える。

### 衣浦観音像のモデル I

さていよいよ観音像のモデルについての話に入りたい。この場合、モデルとはいえ、顔のモデルを意味する。像の本体そのものは新たに創造されたものではなく、伝統的な観音像の形を受け継いでいる。しかし、観音像の顔かたちを浅井長之助は現代的なものに作り変えたのであった。長之助は何かを作る時、とくに鬼瓦の世界でいわゆる「生き物」といわれる、鬼や、神像や、十二支像や、人物や、動物や、植物といった具象的な何かを作る際、具体的に参考になるものがある場合は、直接見て作る習慣があった。「粘土で写真デッサン」しながら生き物を作る技術を鍛えていたのである。(高原2013) これに関する話を新しく鈴木康之と登志子から聞くことができた。

鬼長さんという人は、たぬきを作られたですよねえ、大山(公園)にある。あっちの大きな、あがつとる大きなやつ。あれを作るがために、岡崎まで、あの一、お弁当持って、たぬきを観察に行かれとったもんね。

鬼長こと浅井長之助は、観音像を作った後、そのほぼ6年後の昭和39年(1964)に高浜市大山公園にやはり観音像と同様の土管製の大きな(高さ5.2メートル)を第四工場で作成、森五郎作が自らの窯で焼成している。その時、康之と登志子は同じ工場にいて、長之助がどのようにして「たぬき」を作ったかを実際に見ているのであった。

電車に乗って、「てい…」、定期券を買って

行かれとったわ。(笑い)

ほやあ、あらためて作るでも、工場へ来て、お観音さんちょっと直いただか何だかで、土をこれくらい持って、岡崎城まで行くだからねえ。岡崎城の、あの、お城の所にちょっとした動物園が……。そこのたぬきが、おっ、おったもんでえ。そいつをモデルに、弁当持って通わして、ねんどで、あの一、見本てだか……。

うん、<sup>ひな</sup>雛型を作って、ほいつを持ってきて、この何倍ってって……。

ほいだで一、仕事にもものすごい熱心な人。普通なら弁当もって通わへんよ。(笑い) それこそ、本で「たぬき」見て、それででかそうと思やあ、出来るわけだわ。それ、弁当持って、それも、毎日だから。定期券買って、ほうして通っただあ。

「今から行ってくらあね」ってって、私らがその時に、あの、駅と工場と近かったから、こっちの東をとお通って、かよって……。ほやあ、仕事熱心な人だった。あれくらい熱心でなきゃ、ええものはできんわいと思つて……。 (笑い)

では、長之助が何をいったいモデルに観音像を製作したのであろうか。観音像は高さが8メートルの巨大な立像である。神像ではあるが、人物像の範疇にも入る。全体の形状はもちろん大事であるが、やはり肝腎かなめな場所は顔かたちと言えよう。長之助のものづくりの習慣としての「粘土のデッサン」のモデル選定は今となっては長之助亡き後、知るよし由もない。しかし、何らかのヒントは当時の長之助を知る人たちによって伝えられている。(第4図参照)

鈴木康之・登志子は実際に第四工場で浅井



第4図 浅井長之助 前列左端（工場ではいつも前掛をしていた）

長之助が観音像を製作する現場で一緒に仕事をしていた人物である。文字通り、長之助が何をモデルにしていたかの目撃者である。二人は次のように言っている。

ほやあ、あの、鬼長さが、あいだけの仕事やる人が……、土管屋の一、職人でーと、わしが等はの、仲間が、3、4人おったか。丸さん、亀さん……。

(登志子) ああ、若い人々が等ね。

うん、そういう人が等に相談に来たってことが印象に残るな。相談……だねえ、仕事場で、こういう時はどうせするだらあとか……。

ほいでー、またあー、さっきの話じゃないが、あの、写真持ってきて、え、あの、それこそ、昭和天皇の、お、皇后様、と、それから、中村錦之介かねえ……。それを二枚持ってきて、これを、でー、あの、「合併させたものを顔にしたいが、どう思う」ってって、相談されたねえ。ほやあ、なかなかできることじゃないわね。

(登志子) 「それをモデルに顔のふくよかさを……」……のが、私言われたでねえ。

(登志子) 皇后陛下さんと、錦之介の写真をね。

ほいで、わしが等が全然わかる歳じゃないしー、それこそ、いいか悪いかってやあ、いいとか悪いとかぐらいの返事しかできんわけなあ。こうした方がええとか、ああした方がええとかいうような意見の言える歳じゃないし……。

(登志子) 山本富士子って言われたけど、山本富士子って私は（仕事場で）見たことないけど……。実際つくる時点では、あの一、錦之介と、皇太后さんの写真を持ってきて、見てつくっとならして……。

(登志子) そうして、こう「ふわあっと、こう、ふくよかさのある顔をー」ってって、「それをお観音さんにしたい」と言って。

二人の話から次の事が浮かび上がってくる。まず、長之助が衣浦観音像のモデルにした人物は、一人ではなく二人であったことが第一



第5図 香淳皇后（昭和天皇の皇后）

点である。そして、その二人は一人が昭和天皇の皇后である香淳皇后、もう一人が当時人気俳優でもあった歌舞伎役者の中村錦之介である。さらにこの二人をモデルにした理由が語られている。「顔のふくよかさ」を、つまり顔の輪郭を観音像の顔に反映させようとしたことになる。持ってきた山本富士子の顔写真のコピーを見せると、康之と登志子は次のように言うのであった。

うん、知ってるよ。あの、映画にもよく出て。(笑い) こやあ、ミス日本だがねえ。

(登志子) 私はこの写真、見たことないですよ。あの、(長之助が) 持ってみえたのはねえ、富士子のはねえ……、皇后さんと錦之介の写真は見たんですけどねえ。

ここで、観音像と二人のどういったところが実際に似ているのかと聞いてみた。

ああ、あの、強いて言うなら頬っぺたのふくらみが、あの一、似てるっていうだか、



第6図 中村錦之助

写真に、あの……と思ったことはありません。

ほやあ、ま、錦之介の写真は……。

(登志子) あの人ほどっちかってえと、ここがふっくらしてるねえ、錦之介の若い頃はねえ。で、私はその時に、「ああそうか」、と思って、「ふっくらしとるとこ、モデルにしとらせるんだな」と思ったことはあるんですけどねえ。

このように康之も登志子も山本富士子はよく知ってはいるが、長之助の観音像のモデルには全く登場したこともないと断言するのであった。二人が森五郎作の第四工場の観音像製作現場で見たのは長之助が香淳皇后と中村錦之介の写真を前に立てかけて、作業をしていた長之助の姿なのである。(第5図 女性自身編集部編 1986: 147、第6図 萬屋 1995: 64参照)

ほやあ、お観音さんの顔を作るのは一番最

後だから……。あの、下から順番に作って、一番最後に顔を二つ作ったです。そこにお観音さんがあるけど、下から順番に作った……。

うん、ひな型です。

下から、あの、輪切りにしてって、あの、順番に作ってって、一番最後の顔を作る時点で、あの、今でいう皇太后さんの写真と錦之介、うん、この写真、この顔だね。これがいくつに切れとるだらあ……。8……7つか8つに切れとると思います。ほれから縦にも切れとる。全部で一きつと、50か60になつとるじゃないかな。

ここに二つの興味深い観音像に関連する物件が登場する。一つが観音像は製作する時に顔の部分は一つではなく、二つ作ったことである。二つ目が観音像のひな型の存在である。まずは観音像の頭部にかかわることについて見て行きたい。

ちょうど顔を、このあたりから、できているから、上が……。まあ、試験的に作った顔という事だねえ。はい。ほいで、二つ目のやつが、お観音さんの本体にのつとるやつ。

康之によると、最初の観音像の顔は現在、鬼栄さんの所にあるという。鬼栄は二軒同じ名称の鬼板屋が高浜にあり、康之に確かめたところ、上鬼栄という。何週間かたって、実際に行ってみると、ちょうど事務所の前にある駐車場の隅に土管製の観音像の顔が置いてあった。

焼き上がったからも、一年ばかりじゃないよね、(工場に)置いてあるの。ほやあ、あの、テレビの取材もあったしねえ、ラジオ

の、あー、アナウンサーも、がとうも来たこともあるし、ほいで、まんだテレビがねえ、白黒で一、当然白黒の時代で、まだどこの家庭にもテレビがはいとらん時分で、今日テレビの取材で何時からやるって、となり、見に行った覚えがあるもんなあ。(笑い)ほやあ、テレビに映るかもしれんてえ。(笑い)

このように観音像の製作現場をメディア関係のものが取材に訪れるようになって第四工場は観音像が完成するにしたがって、賑やかになっていったのである。

前もね、工場に誰かか、あの、写真撮りにねえ、作業してたり、焼き上がった時にねえ。あのー、「今日取材がある」てつと、「あんまり埃<sup>ほこり</sup>だらけじゃいかん」てつと、雑巾かけてきれいにして……。

(登志子) 私がやる役目で。(笑い) その時にー、テレビにー、ちょこつと出るかもしれんってつと……。 (笑い) どうしても埃がかかつとるでしょう。だから、もう、今日誰かおいでるとー、あの、五郎作さんが、「おい、今日、だれだれさんがおいでるで、お観音さんを拭いとくれ」つとやられるもんだい、バケツに水汲んでねえ、で、雑巾できれいに拭いてねえ。

で、沢山ですもんねえ、(観音像の)上から下までだから。あのー、これを幾切れか並べてあるから順番にずーつとねえ。(第7図参照)

ばらばらの観音像の部分、部分が作業場にズラッと横に並べて置かれてあったのである。組み立てられてはおらず、観音像のパーツが一つずつ置かれていたのだ。工場で組み立てるに十分な天井の高さがなかったのである。



第7図 鈴木登志子

一つ一つの大きさが1メートル四方ほどは十分にあり、さらに厚みが6センチはあるもので、中は空洞だが、支柱になる障子がいくつもあり、大きく、重い物であった。

大きいもんです。そいつがいくつかって、並んでるでしょう。だからそれをずっと雑巾掛けして。(笑い) 顔も、ザッ、ねえ、まあ、顔だけは、しっ……、丁寧にやったかねえ、あっはははは。(笑い)

この時、顔の部分は二つあった。頭部は上から頭蓋骨を真横に顔面部分と後頭部分に二つに縦に切って、顔に傷を入れることを避けている。身体の部分の下から輪切りにして、像を分割して製作したのである。そして、頭部は前にも述べているように試験用と本番用の頭部が二体作られた。ここからもいかに長之助が顔作りに慎重に慎重を期して臨んだかがわかる。そして、観音像の本体と本番のための頭部は昭和33年に観音寺境内に移され、

組み立てられていったのである。一方の試験用の頭部は第六代鬼長の浅井頼代によると、森五郎作の第四工場の乾燥場に長く置かれていたという。森五郎作の孫にあたる森和信によると、この頭部は半製品を置く倉庫に置かれてあり、「納戸」と呼んでいたという。頼代のいう乾燥場と「納戸」は同じ場所を指しているものと思われる。昭和38年に工場が取り壊されることになった時、観音像頭部の引き取り先を五郎作がさがしていたところ、名乗りを上げたのが、上鬼栄二代目、神谷知佳次であった。知佳次は長之助の次男であり、上鬼栄へ鬼長から養子として入った人物である。その知佳次が父長之助の思い出の品として長之助が試験的に作った観音像の頭部を引き取ったのであった。現在(2013年)もその頭部は上鬼栄に置かれてある。

さてもう一つの観音像に関する物件が観音像のひな型である。鈴木康之・登志子から話を聞いているときに、康之が立ち上がって土間にある棚から降ろしてきたものがそのひな型であった。本来、鬼師は大物を「でかす」時は、ひな型を作る習慣がある。しかし、場所が鬼長ならまだしも、鈴木家にそういったものがあるとは思ってもよらず、いきなり目の前に出されたときは驚きとともに、何ともいえない感動のようなものが湧いてきた。この観音像のひな型はなんと大中小が三体ある。鈴木家の玄関に入ると、土間になっており、その下駄箱の上に観音像が三体並べてあった。

そこにお観音さんがあるけど……。

うん、ひな型です。衣浦観音のそのまんまの姿。

(登志子) これのねえ、これくらいのやつも一番初めにあっただよ。これより小さい

やつがあったじゃん。うち。

(康之) これが一番大きいだらあ。

(登志子) ひな型ではね。こんな小さいやつは、一番、これくらいのが一番小さい。

結局、見せてもらったひな形は大中小と三体あった。大が43cm、中が23cm、小が17.5cmほどのものである。今は黒っぽいこげ茶色をしており、妙に人を引き付ける魅力があった。康之はこの大中小の観音像のひな型の意味を教えてくれた。

まあ、内緒話みたいなもんだけどが、寄付によって大きさが違ってくるです。これを記念品として、贈る金高によって大きさが違ってくる。

衣浦観音像の話が出たときに作られたのが観音像建立奉賛会であった。つまり、衣浦観音像建立のための寄付金の受け入れ団体が設置され、高浜の人々に寄付が呼びかけられたことになる。その寄付金の多寡によって大中小の三種類の大きさの観音像のひな型が記念品としてそれぞれ寄付行為者に渡されたのである。衣浦観音像はこういった意味においても高浜の人々の善意に支えられた観音像であると言えよう。(第8図参照)

その当時、康之は第四工場の職人をしており、観音像に興味があったらしく、記念品として作られた数多くのひな型観音像の中に、細かい部分、例えば指とかが欠けたりしていわゆる失敗作となった観音像を工場から譲り受けて家に持ち帰っていた。そして、欲しい人があるとその都度渡していた。

こういうこと言っちゃいけないけど、傷があるって捨てて捨てるわけにはいかんでしよう。目玉がついてるし。ほいだもんで、家



第8図 衣浦観音像ひな型、浅井長之助作  
鈴木康之所蔵

に幾つもあったです。

(登志子) あったけど、どっかへ、誰かへやった。うーん。ほしいっていう人があると持ってってもらって……。

(登志子) これは、この大きさのは私がみんなにあげたもんだい。ようけ注文して作ってもらっただね。あの子供会のね、役員やとった時に、解散したとき、記念に……。

このように衣浦観音像建立奉賛会とは関わりのない人たちにも、観音像のひな型は渡っているのがあった。ひな型の話について、康之は長之助が観音像を作っていた時、どういった作業を手伝ったのかを聞かせてくれた。

まあ、結局、手伝うってっても、あの、重いものをずったり、あの、それから、あの、二階だから、あの、粘土を上へあげるの手伝ったり、今みたいにエレベーターがあるわけじゃない。手でこうやって抱いちゃ上げるだから。そういう事を手伝ったわけ。ほいで一、仕事の合間見ちゃあ、重いものを場所ちょっと変えてみたり、そういうの手伝つとるだよ。

ほいで、あの一、こういう、(観音像の部分) 中が、あの一、く、く、空洞になっとるわねえ。中と外と一緒に乾くようにしてかんと、傷が出ちゃうから。中へ電球を入れたり、練炭をこう、温度つけて乾かしたり。

(観音像の) 一番下だと、あの、これぐらいに切ってあるわねえ……。そいで、中切るにつけて、お観音さんの外回りだと、中に、まあ、ひと巻き、土で壁を作ります。ほいで、壁、あの一、縦に切るああいう寸法だして、あの一、しょ、障子みたいに入れて、その計算したり……。

ほいで、中は、か、乾きがうんと遅くなるから、ほこへ、電球入れて、それから、寒い時は凍てるから、それを防御せるために、練炭入れたり…… ほれは一、簡単な苦労じゃないと思います。

(登志子) あれ、電球は何個くらい入れて……三個やそっから、ずっと入れて、真中へ……。偏っちゃいかんで、真中へ。八寸(約24cm)の練炭をねえ……入れて。で乾燥。

なんか練炭焜<sup>こんろ</sup>なんかなかったねえ。八寸の。普通なら小さいけど、こんな大きな練炭の、は、覚えているけど……。

それが、一つや二つじゃないでしょう。順番に作って<sup>つ</sup>くにつけて、あの一、こいつが四つに切れとるとすると、一週間か十日、置いちゃあ、次のやつにかかるから、作りかけはいっぱいあるわけ。ほれを全部同じように乾かしてくってことは、相当神経使います。

### 鈴木康之と鬼瓦

康之と話しているうちに妙なことに気が付いた。土管屋の職人なのに土管以外のものをいろいろ作っていたようなことを話すのである。長之助の作った観音像の乾燥の話をしていた時のことである。どのように乾燥させていくのかを話しているうちに、いつの間にか観音像が長之助の観音像だったはずなのに、康之の作った観音像へ変わっていたのである。

(登志子) うちの大きなお観音さん作った時、やっぱり下から作って<sup>つ</sup>くから、上へ行くまでに下が乾燥しちゃったね。真っ白けに。

いきなり何か違う観音像の話に入ったので、何の観音様なのですかと聞き返して、康之が作ったものと分かったのである。

(登志子) 六寸くらいあったじゃない。うちの場合はね。こういうふう<sup>う</sup>に細かく切りこなし、一回ずうっと、自分で設計し<sup>し</sup>といて、あの、絵に描い<sup>え</sup>といて、そいつを見ながら下から土をだんだん、土積み上げて……。

(康之) ほいで、あの一、ここら辺までもう白くな<sup>つ</sup>るとるでしょう。完全、上行くまでは、真っ白だもんねえ、下は。

そして、また、長之助の観音像へ戻るのですが、やがて自分自身の話へ入るようになった。

ここで切つてあるとすると、ここまではね、一つの板で作って、ほいで、その、二段目はまた違うほうで作る。別々のとこで作って、あとで合わせて。

(登志子) だから大変ですよねえ。

つまり、素人の私は像全体を一気に作って、窯で焼成するために、分割するのかと思って聞いていたら、そうではなかったのであった。

(登志子) こう、型紙があつて、それに合わせて、作って、部分、部分を全部別で作ってかれて……。

(康之) こういう厚みのあるものの設計図というのは難しいです。紙に書いたものは厚みがわからんでしょう。それが一番難しいです。わしも大きなものは作った覚えがあるもんだい、ただ、何々を作れって、奥行きがわからんわ。写真を持ってきて、これを作れよってっても、奥行きが写真だとわからんで、それで一番苦勞せるですね。

話が康之の話に時々なり始めたので、何か作られていたのかと聞くと、なんと明らかに鬼師がする仕事だったのである。郡上八幡のシャチ、豊橋市役所の近くにあるお寺の鬼瓦、知多には観音像、といったふうに、とても土管屋がする仕事内容ではなかった。土管屋の職人であるはずの人が、なぜ鬼を作るのかと思ひ、しばらく訳が分からなくなった。しかし、康之からの説明を聞いて、康之は土管屋の職人から鬼師になった人だということに気付かされたのである。康之は昭和45年ごろ

に森五郎作の第四工場を退社している。康之が38歳ごろであった。そして康之はなんと鬼瓦を作り始めたのである。14歳から土管屋の職人をしてきた人が、捜し出した先が、瓦関係の仕事であり、そこは登志子の兄の瓦工場であった。その工場が杉浦陶管瓦工業(株)といい、土管や瓦を製造していた。ところが工場の縮小にともないその半分を鬼瓦部門にし、杉浦社寺としたのである。

(登志子) 鬼に変わったのは、あの一、兄が左前ひだりまえならんうちに、あの一、在所の方が、まあ、古くなつてきて、ほいで、まあ、工場の方、小さくするつてて、こう、窯も築きなおさによ、あの一、危険だからつてつて。で、ほいじゃあ、兄が、あの一、工場を半分鬼瓦にするて言いかけて、で、私、下の弟の方がちょっとしたもの作るようになって、で、私ら夫婦が鬼の方へ一年生でやり始めて。で、見よう見まねで、弟子も、あんた、入つたことないもんでね。

話を聞いていると、やはり長之助の観音像つくりを長期にわたつて目の前で実際に見、長之助という鬼師の仕事ぶりに刺激され、本来持っていた康之の才能が活性化したようにとれるのである。ちょうど篠田勝久こと神谷勝久が長之助の作ったものを見て、「作ってみたいなあ」と憧憬したことと重なり合ってくる。(高原2013) 康之の場合は、長之助と実際に何年も同じ仕事場で働き、長之助の仕事ぶりを直接目のあたりにしたのであるから、その影響力は絶大なものがあつたと思われる。

あの一、土管やつとる頃からカエル作つたり、たぬき作つたり、ああいう、お、おもちゃを作るのが好き……。ほいで、鬼なら似たような仕事だで、ええかなと思つて。(笑い)





第9図 鈴木康之（左）と石川要（右）

（登志子）で、まだ、その時は土管やとったから土管の方、「本社の方へ（第一工場）来てなんか土管のことやるか」って言われたけど……。

「鬼をやってみたい」ってって、そう言うから。（兄の工場が）近くだから、すぐそばでしたもんだいねえ。それこそ三分も行けば工場へ行けるから、こっちから通った方がいいで、遠くの向山（森陶管本社工場）行くよりもねえ。ええ、で、まあ、兄のところまで仕事するようになって。

このように森陶管本社向山工場へ移る話もあったにもかかわらず、慣れ親しんだ土管屋から鬼師の世界へ康之は自ら入って行ったのである。

ほやあ、土管の二十年、三十年やったもんが、手作りで鬼作れったってできるわきゃねえわなあ。ほいだでえ、仕込んでくれた人は、やりにくかっただろうなどは……。半端なことしかできんもんを、それし、年がいったるもんだい、仕込む方が困るな

あ。あまり若造ならいいてえこと言って。（笑い）

その仕込んだ人、つまり師匠になった人が鬼末こと石川<sup>かなめ</sup>要であった。偶然にもすでに要には会って話を聞いていた。鬼末は三州鬼瓦の元祖と言われる山本吉兵衛（1830-1904）の直弟子のひとり、長坂末吉が直接興した鬼板屋である。その二代目鬼末が石川<sup>かなめ</sup>要であった。（高原2003）要は経営していた鬼板屋が行き詰まり、杉浦社寺で鬼師として受け入れられ働くようになった人であった。この石川<sup>かなめ</sup>要のもとで、康之は鬼作りを身につけていったことになる。もともと「生きもの」を作るのが土管職人時代から好きだった康之は、鬼師の要とともに仕事をしながら見て覚えたという。師にあたる要は本当の職人で、仕事は丁寧すぎるほどであったという。また人が良すぎて、経営にはあまり向かない性格の人だったらしい。石川<sup>かなめ</sup>要に直接会ってインタビューをした時もそうだったが、いつも酒気が抜けない、赤ら顔をした人であった。それが原因で身体を壊している。一方、兄の瓦工場を康之がやめたのが平成10年（1998）の12

月の事であった。(第9図参照)

### 観音像と塩焼き

土管焼きは塩を投入して焼き上げる塩焼きである。観音像はそれゆえに塩焼きであり、事実上、焼成によって投入された塩とともに真っ赤になった窯の中で炎と塩によって浄化されているとあってよい。念のために康之に観音様は塩焼きかどうかと聞くと、すぐに返事が返ってきた。

塩焼きです。

おらんとうが焼いただから。全部、あの、窯へ詰め、土管と一緒に詰め込んで焼きました。

(登志子) それも土管をずっと下へ。

(康之) あの、大きな窯でね、ちょびっと焼くってことは損だも損だし、冷めるが早いから乳(貫乳)が入っちゃうです。あの、冷ます時に。ゆっくり冷ましていから、他のもんを入れて、温度を保ちながらゆっくり、じりじり冷まして、ええものは出んです。

(登志子) だからお観音さんだけを切ったやつを窯に入れて焼くことは不可能だね。すき間がすくから。その間の温度がうんと変わってきちゃうで、ひびが入っちゃうといかんもんね。

このように窯の中に土管をできるだけ詰めて、土管の上へ観音像のそれぞれの部分、部分を並べて窯詰し、焼いたのである。

(観音像は) 上です。だから、ああいうものは、積んだ、積んだら、上手に積みれば

いいけど、あの、ちょっとでもずれとると、重なったところが下がります。ほう、ほうすると水平のもんが波打つもんだい、出来るだけ、あの、荷をかけんように焼かんと。

(登志子) ほんなん、焼いとると、ほんつとに焼けた時なんか、鉄の棒でグサッとさせるもんね、ドロドロになってるもんだいねえ。

(康之) ほいで、あの、大きなものは冷ますが難しいで。温度下げる時が。上げるときは三日かかって四日かかって、じりじり上げてけばいいけど、急に下がすと乳が入るので、あの、目に見えんけど、細かい傷を……、叩くと、あの、音が違うわねえ。

だから、ああ、あれ、ひと窯で四日かかります。ひと窯で四日火を焚きっぱなしです。

石炭。石炭ばっかだね。石炭の方が色がいいもんね。うん、あの、ガス窯よりも。ガス窯から1300度まで上げるてえことは不可能に近いじゃないかな。ほいだけ上がらんと思う、力がないで。

1200から1300、窯はこう、丸<sup>まある</sup>くなつとるもんねえ。上は1300くらい行きますね。ほいで下で、1000ちょっとぐらい。どうしても上の方が度が上がるわなあ。

つまり、窯の上部に並べられた観音像は1300度近くの高温で焼かれたことになる。

(登志子) だからこのお観音さん焼くでも、こう、部分、部分で切つてあるから、土管の上、ずーっと、ある程度土管積んで、そ

の上、板……。

(康之) 金板かな。炭化でできた板が……。そいつを並べて、その上へ、あの、並べて焼くです。

康之は第四工場の土管窯で、衣浦観音像の焼成に直接携わった職人のひとりだったのである。

それにたずさわったっていうのが、まあ、生きてるとわしぐらいだろうな。まあ、あとはみな、お観音さんになっちゃつとる。(大笑い)

## 衣浦観音像のモデル II

鈴木康之・登志子に話を聞いた限りでは、衣浦観音像のモデルは明らかであった。長之助が森五郎作の第四工場ですべて実際に観音像を製作していた時にモデルとして二枚の写真を目の前に置いていた。一枚が昭和天皇の皇后である香淳皇后であり、もう一枚が歌舞伎俳優の中村錦之介であった。

鈴木夫妻に丁寧に話を述べ、挨拶して帰る途中、事態があまりに違うことに驚き、もう一度シノダ鬼瓦に立ち寄ることにした。このままでは帰れないといった気分だった。仕事場には宮本恭志夫婦が鬼瓦を作っていた。恭志にすぐに事情を話して、出来れば篠田勝久に会いたいと頼んだのである。恭志はすぐに電話を取り、勝久に時間があるかどうか尋ねてくれた。するとすぐに来てもいいということになり、この時に初めて勝久を迎えに自宅を訪れた。

家に入って少し話をしていると、勝久が持ってきて見せたのが、なんと観音像のひな型であった。さらには、勝久は自分で衣浦観音像を写真に撮り、自作のコラージュ風にしたてた観音像の絵をいくつも見せてくれた。そ

して、そのうちの一枚を進呈してくれた。やはり勝久は衣浦観音像に特別な思い入れがあるようであった。一通り話をすると、いったん勝久の家を出て、恭志のいるシノダ鬼瓦の仕事場へ勝久と一緒に車で行った。その仕事場で、恭志とともに仕事をしている勝久の娘、裕子がいる中、勝久に鈴木夫妻から今しがた聞いたばかりの衣浦観音像のモデルの話をしたのである。すると、勝久は言下に、「顔は山本富士子をモデルにして作った」と長之助さんから直接、仕事場で聞いたどとはっきりと何の迷いもなく、言い切ったのであった。長之助は鬼長の仕事場で職人に、「お観音さんのモデルは山本富士子だ」とはっきりと話していたことになる。山本富士子は昭和6年(1931)12月11日生まれであり、昭和25年(1950)、当時18歳で読売新聞社主催のミスユニバース大会で、第1回目のミス日本に選ばれ、その後、女優として映画やテレビで活躍した人である。衣浦観音像の製作期間は昭和30年あたりから昭和33年ごろまでと考えられ、山本富士子がかもとも輝いていた頃あたり、長之助が観音像のモデルとして選んだとしても何ら不思議はない。(第10図 山本 2002:46参照)

2013年3月4日に上鬼栄の社長、神谷英廣に電話をした。上鬼栄には英廣の父、知佳次が森五郎作から譲り受けた、知佳次の父、浅井長之助の作った試作の衣浦観音像の頭部がある。川角氏のメールに昭和天皇の皇后説を聞いたのは上鬼栄の社長からで、古くからの友達でもあるという。こうしたいきさつで、誰から皇后説を聞いたのか尋ねるために英廣に電話をした。するとその答えは意外な展開を見せた。まず「香淳皇后説を誰から聞いたのか覚えがない」という。そのあとに、付け加えるように小声で、実はもう一つ話があり、「自分の叔母にあたる浅井みとむがモデル」と聞いているというのであった。自分も何となく似ている気がするという。この話



第10図 山本富士子

を聞いたのは鬼長の元社長であった浅井頼代からだという。それでさらにその裏を取るために、鬼長へ電話してこの件について聞いてみた。電話に出たのは鬼長の現社長、浅井和美であった。頼代の長女である。ところが、和美によれば、それは「みとむ」ではなく、長之助の奥さんであった「きみ」であるという。和美が言うに、みとむは長之助の長男、道夫の嫁であり、そういった話は聞いたこと

がないという。しかし、鬼長で代々聞かされている観音像のモデルは長之助の嫁である「きみ」だという。直接母の頼代に確かめたらいいということになり、頼代の電話番号をもらった。こうして頼代と電話を通して話ができるようになった。頼代は以前、鬼長へ調査に来た時に、鬼長の本宅で直接会って話をしたことを覚えていた。頼代は神谷英廣にはこの件は話した覚えがないと言い、観音像のモデルについては、「きみ」であると聞いているという。また和美も、頼代も、「雰囲気」、「輪郭」が似ているという。(第11図参照)

以上のように、衣浦観音像のモデルは、昭和天皇の皇后、香淳皇后、中村錦之介、山本富士子、そして浅井きみの四人となった。

### ま と め

浅井長之助が製作した衣浦観音像のモデルを追って調査してきた。篠田勝久の山本富士子説、鈴木康之・登志子の香淳皇后・中村錦之介説、浅井頼代・和美の浅井きみ説、そして神谷英廣の香淳皇后、浅井みとむ説と合計五人のモデルが結果として登場したことになる



第11図 浅井きみ

る。このうち、「浅井みとむ」は浅井頼代・和美の話から「浅井きみ」の覚え間違い、ないしは聞き違いであろう。なぜこのように複数のモデルが存在するのか不可思議であるが、それぞれの話の中にヒントがあるように見える。

まず実際に製作者の長之助が観音像を製作していた現場、森五郎作の第四工場にともにいて、長之助が製作しているところを目で見、長之助の製作の補助を实际にした鈴木康之・登志子の話である。長之助は観音像を作る作業場に香淳皇后と中村錦之介の写真を置いていたことは事実であろう。ところが長之助が何をその二枚の写真から参考にしていたかが重要になる。康之・登志子は次のように述べている。

(康之) それを(写真)二枚持ってきて、これを、で一、あの、「合併させたものを顔にしたいがどう思う」ってって、相談されたねえ。

(登志子) 「それを(写真)モデルに、顔のふくよかさを……」のが、(長之助が)私に言われたでねえ。

(康之) 皇后さんの写真を持ってきて見てつくっとらして……。

(登志子) そうして、こう、「ふわあっと、こう、ふくよかさのある顔を」ってって、「それをお観音さんにしたい」と言って……。

さらに出来上がった観音像を見て二人は次のように言っている。

(康之) あの、強いて言うなら、頬っぺたのふくらみが、あの一、似てるっていうだか、写真に、あの、と思ったことはありま

す。

(登志子) あの人(錦之介)どっちかってえと、ここがふっくらしてるねえ、錦之介の若い頃はねえ。で、私はその時に、ああそうかと思って、ふっくらしとるとこ、モデルにしとらせるんだなと思ったことはあるんですけどねえ。

この話から長之助のモデルの参考の仕方や見方が見えてくる。重要な言葉がある。「合併させたものを顔にしたいと思うがどう思う」である。そして、この二枚の写真から取り出してきたのは「顔の、頬っぺたのふくよかさ」であった。

次に鬼長の家族、浅井家に伝わっている衣浦観音像のモデルは「浅井きみ」である。何が似ているかについて、鬼長の六代目頼代、七代目和美は、「雰囲気、輪郭」だと述べている。

ところが、鬼長の仕事場で、長之助とともに仕事をしていた職人、篠田勝久が長之助本人から直接聞いた話によると、「顔を、山本富士子をモデルにして作った」となっている。この場合、顔の輪郭ではなく、顔そのものと言えよう。著者自身も山本富士子の顔立ちに観音像は似ていると思う。川角氏も「ネットで見たら添付の写真(山本富士子)はちょっと似ているかなと思います……」という。

つまり、以上の点から見えてくることは、長之助は衣浦観音像のモデルはだれか特定のひとりではなく、複数のモデルを採用して、長之助が頭の中で、それぞれを「合併」させて、一つの観音像の顔に合成させたのである。この工程を経て、その時代を反映させつつ、同時にこの世のものではない観音像の姿を創造しようとしたと考えられる。(第12図参照)



第12図 衣浦観音像

参考文献

- 女性自身編集部編 1986年 『御素顔の皇后さま』  
 (株)光文社
- 高原隆 2003年 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛  
 (1)—」『文明21』第10号：163-189
- 2004年 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・  
 岩月仙太郎系(1)—」『文明21』第12号：113-165
- 2009年 「鬼師の世界—黒地：杉浦彦蔵と  
 窓庄—」『総合郷土研究所紀要』第54号：57-81
- 2013年 「鬼師の世界—白地：シノダ鬼瓦  
 —」『総合郷土研究所紀要』第58号：1-21
- 内藤良弘 2008年 『高浜の土管屋さん』私家版
- 山本富士子 2002年 『いのち燃やして 山本富士  
 子』(株)ワン・ツー・ワン・プロダクツ
- 萬屋錦之助 1995年 『わが人生 悔いなくおごり  
 なく』東京新聞出版局